
錬金術師へ続く道

因幡の雪兎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

錬金術師へ続く道

【Nコード】

N2089Y

【作者名】

因幡の雪兎

【あらすじ】

現代世界から異世界へと転移した少女が元の世界に帰ることを目標に錬金術を学ぶ話です。

本作品はアトリエシリーズの二次創作となっています。

01：出会い（前書き）

小説を書くこと自体が久しぶりの為内容や表現に拙い部分があるかと思われます。

駄文じゃないか、と言われるかもしれませんが宜しければお付き合いください。

01: 出会い

「気がついた？」

木漏れ日が差し込む緑の天蓋をバックに、雪の顔を心配そうに覗き込んでいる女性が言った。

年齢は恐らく10代後半〜20代前半、まだ中学生になったばかりの雪からすればすごく年上の人物だ。

袖上から長い布を下げたファンタジーのお姫様が身につけているような浅黄色の可愛いらしいドレスを着ている。

顔は……。可愛くて綺麗。橙かった明るい金色の髪、深窓の令嬢を思わせる繊細そうな印象を受けながらもその内側に何処か活発な印象が見え隠れする白い肌、そしてぱっちりとした黒い二つの瞳。その二つの瞳が興味深そうに、雪を見下ろしていた。

「えっと……はい」

状況が良く飲み込めない、この女性は誰なのだろう？ここはどこなのだろう？

考えようとしても倦怠感と疲労が全身を包んでおり頭がよく働かない。

運転があまり上手でないバスや自動車に長時間揺さぶられた時のような気持ちの悪さだ。

「森をお散歩していたらいきなり私の前に現れて、そのまま倒れた時はびっくりしちゃったわ。熱は無いみたいだけど、何処か痛む所はある？」

小さく首をかしげながら雪の額に手を当て、具合の悪い所は無い？

と問いかける女性。

首を縦に振ることと答えようとした雪は首筋に当たる柔らかい感覚と温かさに気が付き、自分が女性に膝枕をされているということを理解した。

慌てて体を起こす。

年上の見知らぬ女の人に膝枕で看病してもらったなんて、恥ずかしくて顔から火が出そうだ。

「大丈夫急に体を起こしたりして? ……それとなんだか顔が赤くなってるわよ?」

「い、いえいえっ、全然全く本当に大丈夫です!」

「本当に?」

「本当にほんとでふっ、あ」

焦るあまり舌がもつれた、しかも噛んだ。全身に痺れが走るほどに痛い。

雪は口元を押さえてその場に崩れ落ち、目尻に涙を浮かべてぶるぶると震えた。

「あらら……大丈夫じゃなくなっちゃったみたいね」

女性はそう言っ腰に下げていたポーチから小さな十字架を取り出す。

一般的な十字架とは少し形が違い、頂点の部分が中心が空洞となつた円状の十字架……所謂アंकと呼ばれるものだ。

そのアंकを両手で握って、小さく何かを呟くとアंकから光が溢れて雪を包み込んだ。

同時に口の中の痛みと全身を覆っていた倦怠感が引いていく。

「これで大丈夫？」

雪は自分の体に起こった変化に眼をぱちぱちさせた。

あれだけ痛かった舌に痛みはもうない。恐る恐る嚙んでしまった舌の表面を指で撫でて傷らしきものは見られず腫れもない。

まるで魔法か超能力だ、一瞬で傷を治すなんてそうだししか思えない。

「は、はい、大丈夫です。」

「あんまり焦るとまた舌を嚙んじゃうからゆっくりでいいですよ」

興奮を抑えきれない様子ではしゃぐ雪に優しく笑いかけ、女性はアソックスをポーチへと戻す。

「自己紹介がまだでしたね、私はラステル・ビハウゼンと言います。貴方は？」

「あ、はい。わたしの名前は雪です、あまみやゆき天宮雪」

女性の名前を聞き、外人さんなのかな？でも凄い日本語が上手だからハーフなのかもと考えながら雪も自己紹介を返す。

「アマミヤちゃんって呼べばいいのかな？それともユキちゃん？」

「あ、ユキの方が名前なので出来れば其方をお願いしてもいいですか？ビハウゼンさん」

一卵性双生児である雪は双子の妹と区別を付ける為、苗字よりも名前と呼ばれる事が多い。

家庭でも学校でも”アマミヤ”でなく”ユキ”と呼ばれる事が多く、苗字よりも名前で呼ばれる方に慣れている。

「ビハウゼンさん、じゃなくてラステルでいいですよ、私も家名じゃなくて名前で呼ばれる方が嬉しいです」

「わかりました、ラステルさん」

にこやかに微笑むラステルが差し出した手を取り、立ちあがる雪。お互いにもう一度名前を呼び合って自己紹介を終える。

この辺りでようやく頭がはつきりとしてきた雪は自分が抱いている疑問（ここはどこなのか、自分はどのように倒れていたのか）をラステルに問いかけようとする。

しかし、それより早くラステルが発した言葉を聞いて雪の思考は停止してしまった。

「所でユキちゃんは妖精さん？それとも錬金術師さんかな？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2089y/>

錬金術師へ続く道

2011年11月4日11時09分発行